
銀の刃に を込めて

かりとぼるふ 893

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の刃に を込めて

【Nコード】

N0734Q

【作者名】

かりとぼるふ 893

【あらすじ】

ある日少年は、兄の知り合いという女性から銀色のケースを受け取る。

そしてその日から少年の運命は動き出す。

転がりだした石のように

少年の意思を交えることなく。

ただ坂の終わりを目指して

ケース（前書き）

初投稿です。

生暖かく見守ってください。

感想をいただくと作者はハッスルします。

ケース

カツ

俺は椅子に深く腰掛け窓を見つめていた。

カツ カツ

今日の月はいつもより明るい気がする。

カツ カツ カツ

いや？ 昨日の月もこうだったか？

カツ カツ カツ カツ

いや、もうそんな事はどうでもいい。ようやく俺の願いが叶うのだから。

カツ カツ カツ カツ カツ

こうなるとこれまでも日々も懐かしくなってくる。この部屋でこうして何度の月を眺めたのだろうか？ 正直もう覚えてはいない。

カツ カツ カツ カツ カツ

だがそんな日々も今日で終わりだ。さあ、迎えの準備をしよう。

カッソ

ようやく願いが叶うのだから…。

開けっ放しにしている窓から春の風がふわりと吹き抜ける。この狭いが趣きのある部屋の隅々にまで風が満たされるたびに春がきたことをしみじみと実感する。この気温ならばそろそろ桜も咲き始めているころだろうから、中央公園あたりに散歩に連れていくのも良いかもしれない。

「ミッソーちよつとこっち来てー」

と、とりとめのないことを考えているうちに暴君からのラブコール。

「はいはい。すぐ行くから待ってる」

後ろからはーいという返事が聞こえてきたので、俺はよっこいせと我ながら少しじじ臭いと思いつつも掛け声を掛け体を起こす。正直もう少ししたらだらとしていたかったのだが、行くと言った以上行かなければあとが怖い。

そうして、階段を降りて一階にある眞森の部屋に入る。

「うむ。すぐに下りてくるとは感心感心」

と、ベットに横たわり偉そうに宣っているのが、この部屋の主である眞森だ。俺と眞森との関係を説明するのは話すと何かと長くなるのでまた次の機会に譲ることにする。いや本当にややこしいんだわこれが。

「んでなんか用か？まさかテレビのリモコン取ってーとかいうふざけた用事なら、俺は速攻かつスタイリッシュに自分の部屋に戻るぞ」

「まさか、そんな訳無いじゃん。さっき玄関の呼び鈴が鳴ってたの。どうせ気付かなかったんでしょ？」

はい。おっしゃるとおりです。

「全く全然少しも聞こえなかったな」

と、偉そうにそっくりかえってみる。

「はいはい。んな阿保なこと言っていないでさっさと玄関に行く。お客様さんさつきから待ってるんだからね？」

「へーへー。でも、たまにはお前が出てみれば？ 新しい純愛ラブソデイが始まるかもよ？」

「実現不可能なことを抜かしてないでさっさと玄関に行く！」

と言って追い出されたので俺はおとなしく玄関へと向かう。

足が無い眞森の代わりに。

あれはもう六年も前の話だ。眞森と、俺の先生である眞森の父親、そして先生の奥さんが事故にあったのだ。

原因は対向車線を走っていたトラックの運転手の居眠り運転。中央分離帯を乗り越え、一直線に眞森たちが乗っていた車に衝突。そして二台の車はそのまま壁に激突、大破したらしい。トラックの運転手と先生たちは即死。そして眞森だけが奇跡的に生き残った。

いや、奇跡的というのはおそらく間違いだろう。両方の車が大破するほどの事故だ。いくら運が良かったとしても生きているはずがない。おそらく先生が守ったのだ己の身を挺して。

俺は綺麗に掃除されている廊下を歩いて行く。うむ、きちんと掃除はされているようだ。そしてふと庭のほうに目を向けると庭木も綺麗に手入れがなされており、池もきちんとされていた。さすが崩城家専属のハウスキーパー。この広い崩城邸を隅から隅まで塵ひとつ残さず綺麗に掃除し、庭木の手入れ、池の清掃まで完璧にこなすとは。そんじょそこいらのチラシを配っているメイドさんとはわけが違う。まあもつともメイド衣服は残念ながら着ていたことはないが…。

などくだらないことを考えているうちに無闇矢鱈と豪勢な玄関に到着。ところがどっこい、まだ表門まで歩かにやいかんのよ。

そして俺がやたらとデカイ表門を開けるとそこにはオッパイ神がいた。

正確には銀色に光るケースを輸入物のいかにも排気量の多そうなバイクに立てかけ、自分もハンドルの上で組んだ腕の上に胸を置おかれている大変グラマラスなお姉様がいらっしやった。

（何だあの胸は！？デカイデカすぎる！F？G？いやひょっとしてH！？あんな胸がこの世に存在しても良いのか！？いや良くない。嗚呼素晴らしいかな反語表現！それにあの大胆なライダースーツ！あれじゃ体のラインがまる分かりじゃん！むしろ見せつけてる！？この従順な子羊に見せつけちゃってんの！？ってなんてアホな事を考えてんだ俺は！？落ち着け。落ち着くんだ八雲照騎！でも眞森のナイナイペッターンな胸と本当に同じ胸かと神に問いただしたくなるような圧倒的なポリウム！そしてその核兵器級の胸にリベリオンするかのごとく細く引き締まったウエスト！さらにそこから続く禁断の知恵の実もかくやという魅惑の果实！ああ、俺はもう死んでもいい！死して一片の悔いなし！神様、そして俺を産んでくれた顔も名前も知らないお母さんありがとう！本当にありがとう！」

「おいゴラァー！ 聞こえてんぞこのウストラトンカチがァー！ 誰がナイナイペッターンだってエー？ てめえ憶えてるよォー！ ゲヘナの炎でこんがりウエルダンにしてやるウー！」

どうやら途中から声に出していたらしい。照騎くん大ピンチ

「あら、あなたずいぶん情熱的な恋人を持つてるのね」

俺がどうやって眞森の怒りの矛先から逃れようかとあれやこれやと考えていると、オッパイ神さまが声をかけてきた。

そのクスクスと笑っている声は、一片の汚れない童女の張りど、過酷な人生を乗り越えてきた老婦人の深みを兼ね揃えた不思議と色っぽい声であった。

「で、ここが崩城邸でいいのよね？ 見たところ表札が出てないようだけど…」

オッパイ神さまが少し不安げな声で聞いてきた。この崩城邸は諸事情により表札を出していないのだ。

「え？ あ、はい。たしかにここが崩城邸ですが…。あつ、眞森に用があるんですか？ だったら少し待ってもらうか、直接母屋まで来てもらうことになりますが…」

脳みそがトリップしている状態で質問されたので、若干返答が遅れる。

「いいえ。あなたに用があつて来たのよ、八雲照騎君」

「……………え？ 今なんて？」

「だからきみに用があつて来たつて言ってるの。正確には渡す物」

と言ってオッパイ神さまはバイクに立てかけていた銀色のケースをコンコンと叩く。その銀色のケースは縦が十センチ、横が三十センチほどで、高さは女子の平均身長ほどもあり、重さは中に入っ

いる物にもよるが、それなりに重量がありそうだった。

「渡す物っていったい誰からのものなんですか？ 俺にはそんなゴツイものを送ってくる知り合いはいないんですが…」

というか、いままで俺宛の郵便物が来たことは年賀状を除いて一度もない。我ながら友達いねえな、チクショウ。

「フフツ、誰からだと思う？」

「……………いえ、全く検討がつきません…」

「大ヒント。6年前にいなかった人からよ」

六年前にいなかった人？ 何を言ってるんだこの人は？ 俺の知っている人物の中でその条件に該当するのは一人しかない。そしてその人物から俺宛に荷物が届くはずがない。届くはずはないのだが、でももし、もしそれが本当だとしたら…？

「兄貴から…なんですか…………？」

俺はその一言を喉から搾り出すように呟いた。緊張しているのが自分でもよくわかる。

「Exactry」

その通りよ、と彼女は静かに呟いた。

「兄貴から俺への届けものっていったいどういうことですか？ いつ預かったんですか？ というか、あなたは何者なんですか？ 兄

貴の居場所は知ってるんですか？ 連絡先は？ 今何をしているかは？ 急にいなくなった理由については？」

俺は彼女に詰め寄ろうとした。やっと見つかった行方不明の兄貴への手がかりだ。見たところ兄貴が失踪したことについて、何らかの事情を知ってるようなので、なんとしても何らかの情報を教えてもらわなければ。

「克騎さんについて知りたいのは分かっているから、まずは落ち着きなさい。話すと長くなるから詳しいことは省くけど説明するから」

彼女は右手で俺を制止したまま、しゃべりだした。

「がっかりさせるようで悪いけど、私も克隆さんの失踪については、そう詳しく知ってるわけじゃないの。六年前ふらっと私の店に現れたと思ったらこのケースをあなたに今日渡すように私に言って、そのまま、またふらっと何処かに行っちゃったのよ。だから今克隆さんがどこにいるかはわからないの」

「さすがに私も中身が気になったから、後日克騎さんにケースの中身を聞いてみようと思ったの。でも克騎さんはでなかった」

「その後、私も気になってアレコレ調べてみたんだけど、結果は梨の礫。分ったことといえば最後に克騎さんが目撃されたのが六年前だということだけ。それ以外のことは全くわからなかったわ。生きているのか死んでいるのかさえも」

まあ、克騎さんのことだから死んでるってことはないでしょうけど。彼女はそう締めくくった。

「…………結局、兄貴については何も分からないってことですか…？」

俺はポツリと呟いた。正直このまま地面に座り込みたい。手がかりが見つかったかと思えばこれだ。

「いえ。そういう訳でもないのよ」

彼女はあっさりと言った。知ってるのか知らないのか結局どっちなのだろうか？

「でもまあ、これ以上のことはここでは話せないわ。まだ聞きたいのならこの店にきて」

彼女はそう言っただけに一枚の紙を放ってきた。見たところそれは住所と簡単な地図が書かれており、そこに彼女の言う店があるのだろう。

「あ、あとこれもね」

彼女はそう言っただけにさらに銀色に光る何かを放ってきた。手のひらを開いて、空中で難なくキャッチしたそれを見てみるとそれは銀色に光る指輪だった。大きさはちょうど親指に入るくらいのもので、表面にはどこかの外国語だろうか？ 見たことも読み方も分からないアルファベットの親戚のような文字がびっしりと刻まれていた。

「ハイ。これでラスト」

そう言っただけで彼女は放ってきた。

銀色のケースを。

「のわーーーーー！？」

「あら？ どうしたの？ いきなりそんな奇声を上げて？」

「あなたがいきなりこんなモノを放ってくるからですよ！」

俺は落としたケースを打ち抱えたまま、キョトンとした表情のオッパイ神様に怒鳴り返した。オッパイ神さまがホイッと軽そうに投げていたから、軽いのかな？と思つて片手で受け止めようとしたがとんでもない。とっさにもう片方の手で支えなければ取り落としてしまうほどの重量だった。いったい何キロあるのだろうか？

「まあいいわ。たしかに渡したからね」

それじゃあバイバイと言ってオッパイ神さまはバイクのエンジンをかけ始めた。

「ちょ、ちょっと待ってください。このケースの中身はなんなんですか？」

俺は慌てて質問をした。よく良く考えてみればこれはアノ兄貴からの贈り物なのだ。どこか外国の謎のドルメンとかならまだしも、最悪幸せになれる白い粉とか、どこぞのマフィアから巻き上げた拳銃とかの可能性もある。

「ああ、その中身？ 刀よ刀。ただしなんでも切れる刀」

もちろんこんにゃくだって切れるわよ。そう言い残し、オッパイ

神さまは颯爽と去っていった。

刀

俺、八雲照騎は逡巡していた。

横暴な幼なじみに1年365日振り回されている関係で、メンタル面についてはかなりの自身があつたのだが、どうやらまだまだ鍛錬が足りなかったらしい。

だが、どうか言い訳をさせて欲しい。

ついさっき俺は、兄の知り合いを名乗る、やたらとグラマラスかつセクスウイゝなオネエサマに失踪した兄ついでの話聞かされ、おまけにとびつきりショッキングな置き土産をもらたのだ。

そう、置き土産。愛しいクソツタレ兄上様から俺への贈り物。

サガシモノからのオクリモノ。

……正直言つて、こんな不吉極まりない物はすぐさまドブへでも捨ててしまいたかった。幼い頃から、あの横暴極まりない兄に関わつてろくな目にあつた試しがない。

あえて具体例をあげるとすれば、俺がまだピュアピュアな小学生だった頃の話だ。学校から帰宅した兄が俺に綺麗にラッピングされた箱を渡してきたので、何だろうかと思い開けてみたらいきなりその箱が爆発したのだ。

俺ごと木っ端微塵に。

……後に聞いてみたところ、あの箱は兄の友人がいつものお礼にと渡してきたのだが、なんとなく嫌な予感がしたため俺に開けさせたらしい。そんなことがあったので、それ以来俺は兄から物は受け取らないようにしている。

だが俺は兄貴からだというケースを受け取った。そしてまだ捨てていない。

アノ兄からの贈り物だ。ならばなにか兄についての手がかりになるかもしれない。

そう思ったからだ。

やはり眞森にも見せるしか無いか。俺はそう決心し、銀のケース片手に眞森の部屋の戸を開いた。

眞森の部屋は崩城邸の一階にあり、中庭に面しているため日当たりも良い。内装の方かというと、年頃の高校生らしくおしゃれな雑貨屋や、小洒落た家具などが配置されており、持ち主のセンスの良さが伝わってくる。

そして、その部屋の主である眞森は、いつものように部屋の端に置かれているベットに寝そべっていた。

純白の下着姿で。

「……………何してんだ？」

さらに詳しく言うとフリフリのヒモパンを履いて。

「……………ついに頭が湧いたのか？」

俺は呆れた顔でそう聞いた。俺は別に自分の家だから眞森がマツパでいるのがコスプレしてようがどうこう言うつもりは無いのだが、さっきまで服を着ていたのに戻ってきたらパージしているのだ。

さすがに一言言いたくなる。

「なんで？ ナンデデスって？ よくもまあ、そんな事が抜け抜けと言えるわネ……………」

「……………そんな地獄の底から響いてくるような声でささやかないでくれよマイハニー。ゾクゾクくるだろ。……………つーかまじでワタクシ何か粗相をいたしましたっけ？ とんと身に覚え無いのですが」

「……………さっき玄関で人の身体的特徴を論ってたのは誰だったっけ？」

「……………あー」

衝撃的な出来事がタンDEMでやってきたせいですっかり忘れていたが、そういえばそんな事をついつかりシャウトしてしまったかもしれない。

「ていうか、誰がナイナイのペツタンよ！ 去年の今頃と比べたら3ミリも大きくなってるんだからね！ 3ミリも！」

「眞森、それは誤差の範疇だ」

3センチならともかく、3ミリなら確実に誤差だ。

「ていうか……！」

「お前の胸の成長具合はこの際どうでもいいから、まあとりあえずこれを見てくれ」

一刀両断。長くなりそうなのでバツサリと切り捨てる。

「……どうでもいいってひどくない？」

眞森が拗ねたように頬を膨らませている。うん、こんな表情も小動物チックでじつに可愛らしい。

「んな拗ねたような顔すんなよ。今晚風呂にはいるときにちゃんとモミモミしてやるからさ」

と、俺はドヤ顔で言ってみる。あ、俺じゃなくて僕か。

「……あんた学校でそんな事言ったら殺すからね」

「イエス ユア マジエスティー。しかと肝に銘じておきます」

ケースを受け取った眞森はひっくり返したりして隅から隅まで眺めた後、俺に質問してきた。

「これ何？」

「分からん」

即答。

「……それじゃあ、送り主は？」

「兄貴」

これまた即答。そしてそう答えた瞬間、眞森の表情が変わる。

「……兄貴ってヨシくん？」

「それ以外に誰か俺に兄貴がいたか？」

というか兄貴以外に親族はいない。たぶん。

「でもヨシくんからってどういう事なの？　だってヨシくんは……」

「そう、ただいま絶賛失踪中。あずけてたんだとさ知り合いに」

俺はオッパイ神様から聞いたことをかいつまんで説明する。

「……要するに何にも分かんないってこと？」

「んーそうでもないっぽい」

「ないっぽいって？」

「なんでも知りたきゃそのケース持ってここまで来いだとさ」

俺はポケットに入れていた地図を眞森に見せる。さっきよろつと見てみたのだが、その地図の書いてある場所はともこの街の繁

華街周辺らしかった。

ついでに、この街のことについて少し説明すると、この街は川を挟んで北側に住宅地と公園がある居住区広がっており、南側には役所や、駅、ショッピングモールなどが広がる都市部が広がっている。そして俺と眞森の通う学校があるのは、川を渡ってすぐの街側だ。

「ふーん……で、行くつもりなの？」

「まあ、行こうかなと思ってるんだけど、どうした？」

「……だって、なんかその人怪しくない？ 本当にその人ヨシくんの知り合いなのかな？」

「ああ、それはたしかに俺も思ったけど……。なんつーか、あそこまで怪しいとむしろすんなり納得できるつーか。ほら、だってアノ兄貴の知り合いだぜ？ 怪しくなかったらそっちのほうがむしろ怪しい」

アノ兄貴は、性格破綻している割には、なぜか人を引きつける魅力のようなものを持っていた。その魅力は年齢、人種、性別を問わず有効で、非常に多種多彩な人間が兄貴の周りには常に集まっていた。

そして、兄貴が失踪する前に何人か兄貴の知り合いに会ったことがあるのだが、まともな人間は一人もいなかった。

一例を上げるならば、ニコニコと底のしれない笑を浮かべている青年。やたらと長い黒髪で超絶美人なのだが非常に個性的なしゃべりかたをする少女。銀髪碧眼で西洋人形のような外見なのだが、こ

ってこての関西弁を喋る女の子。

そして今日のお姉様。

もし持つてきたのがあのオッパイ神様でなく、そのへんのパンピ
ーならおそらく俺は信じなかっただろう。

ベットの上で、フムフムと納得している様子の眞森がふと思いつ
いたように呟いた。

「ねえ、これの中身何かな……？」

指でコンコンとケースを叩きながら聞いてくる。

「刀だとき」

「刀？」

「そう、ジャパニーズブレード。ただし何でも切れる優れもの。コ
ンニャクだってスーパスパ」

それってなんて斬鉄剣ですか？ そんな幻聴が聞こえる。

「ねえねえ。それじゃあ、開けてみない？」

眞森がキラキラとした目で見つめてくる。そういえば眞森は昔っ
から、先生たちから貰ったプレゼントをニコニコしながら開けてた
っけ。

「そうだな。俺もちょうど気になってたし……。んじゃ、いっちょ

開けてみつか」

「イエーイー！」

そういう訳なので、早速ケースを開けてみる。

ケースの造り自体は簡単なもので、鍵などの類はついておらず、蓋を固定するための留め金だけが付いていた。

……ガチャリ

……ガチャリ

……ガチャリ

……何だろうか、留め金をひとつ外すことに何か……何か良くない物が漏れ出してくる……そんな嫌な感じがする。

どうしてだろう？ このケースを開けてはいけない気がする。開けてしまえば何かが変わってしまうような……そんな嫌な気がする。

『このまま、また留め金をかけ直してしまえ』

頭の中でささやき声が聞こえる。

『そして何処かへ捨ててしまえ。なーにバレやしないよ』

『それで万事丸く収まる』

『開けたら多分引き返せないぜ？』

『きつとロクでもないことが起こる』

『それでもいいのか？』

そう、誰かがささやく。

そうだ。今さら俺が兄貴に関わる必要なんて無いんじゃないか？
兄貴が俺に送りつけてきたケースを開けるってことは、そのまま
アノ兄貴ともう一度関わり合いになるということだ。

ならばこのまま……。

「……どうしたのミツ？」

「えっ!？」

「なんか最後の留め金に手をかけたまま、怖い顔してたよ？ ……
どうかしたの？」

「いや……何でもない。何でも」

……そうだ。捨てるもクソもない。この部屋に入る前に決めたじ
やないか。それになんかヤバイもんが入ってたら、そんな時改めてポ
イすればいい。

『開けるのか？ あーあ。どうなっても知らないぜ?』

黙れ。人の頭ん中でブツブツ囁くな。

俺はもう決めたんだ。

……ガチャン

最後の留め金を外す。

「……開けるぞ」

俺はケースの留め金をすべて外し蓋を開いた。するの中には、

「え……？ なに……これ……？」

「……っつ！？」

白銀に輝く日本刀らしきものが入っていた。

刃長さはざっと百二十〜百三十センチぐらいだろうか？ 柄も合
わせると、長さはゆうに百五十センチを越えている。

「刀……なのかな……？」

「……………」

眞森が自信なさそうにつぶやいた。それもそうだろう。分類的に
は太刀であろうその刀は、鞘も柄も金属でできていた。

翼の生えた幼子、髭を蓄えた老人、肉付きのいいふくよかな女
性。

鞘や、柄の部分まで、優美な装飾が施されているそれは、人を切
るための物騒な道具ではなく、どこか外国の小洒落た美術館のショ
ーケースが似合う美術品にも見えた。

「きれい……………」

しかし、それは決して美術品ではなかった。試しに手にとって少し抜いてみたが、刃はきちんとしており、刃のきらめきは、自らが武器であると、人を殺す道具であると、自己主張していた。

そして、柄の横面には文字が掘りこまれており、そこには、

「えり……えり………れみゃ………？　なんだこれ？」

「エリ・エリ・レマ・サバクタニ　日本語に訳すと、神の叫び……かな？」

「髪の毛の叫びね……」

「それじゃメデューサだよ」

「わかってる」

空気がシリアスだったから少しボケただけだ。

「キリストがゴルゴダの丘で処刑される際に言った言葉でね、結構解釈に諸説があるの」

「お前よく知ってんな」

眞森の小ネタを聞きながら、俺は刀を抜く。きちんと手入れされていたのだろうか、剣先までサビはひとつもなく、眞森の部屋に差し込んでいる陽光を反射させ、キラキラと輝いている。

反りは中反り、刃文はのたれ乱れ刃、切っ先は火炎帽子。

「……なかなかの業物だな」

「わかるの？」

「ああ」

まあ、なんとなくだが。

「なかなかって、具体的には？」

「そうだな……。使い手にもよるが、それなりの腕の人間が使えば鎧ごと中身をスライスハムにできくらい……。かな？」

俺は刀を目の高さまで持つてくる。刃にはただの少しも欠けはなく、また刀身にはただの少しの曲がりもない。まごう事無き名刀だ。

ただし、それはこの刀の材質が鋼ならば、だ。

独特の金属光沢。

日本刀にはありえない輝き。

人殺しの道具にはありえない輝き。

この輝きはもしかすると……。

「ねえミツ、この刀の材質って……ひょっとして銀？」

「……やっぱそう思うか？」

ひょっとして、そうじゃないかなーぐらいに思っていたが、眞森がそう言うのなら、やはりそうなのだろう。

しかし刀の材質が銀？ 「冗談だろう？ 銀は展性、延性がとても大きい。展性、延性が、だ。そんなモノを刀の材料にしたらどうなるか？ 答えは簡単だ。柔らかいのでとても使いものにならない。きつとすぐに曲がってしまう。

いったいどういう事なのか。

少なくとも、これがただの刀でないことだけは確かだ。

「ねえ、試し切りしてみない？」

俺がウンウンと頭を悩ませていると、眞森がそんな提案をしてきた。しかし試し切りか。いいかもしれない。どうせ兄貴の送ってきたものだ。万が一折れても問題はない。

……それに本当になんでも切れるかもしれないし。

「……試し切り自体はいいが、眞森」

「え？ なに？」

「まず服を着ろ」

このまま眞森を外に連れ出せば、近所の有閑マダムの皆様から、あらぬ誤解を受けるようになるだろう。

俺は眞森に着せてやる服を選ぶべく、ダンスの方へと向かった。

……この時の俺はまだ気づいていなかった。今までのあたりまえの日常が終わったことに。

そう。俺の平穏な日常は、この日、麗らかな昼下がりに終わりを迎えていた。

銀色に輝く、一振りの刀によって……。

うっかり&魔法

「ミッー。何してんのこっちこっち」

塀から街並みを見下ろしながら考え事していると、眞森からお呼びがかかる。その右手には、さっきまで通話していた携帯が握られている。

眞森に服を着せた後、俺たちは中庭に出ていた。

何のためか？ それはもちろん、

「で、ハーメルさん何て？」

「うん。どうせ捨てるからやっていいって。むしろ『細かくしてくれたほうが、運ぶのが楽なので、よろしく照騎くん。ベストはみじん切りです』だってさ」

THE 試し切り。

俺は苦笑を浮かべる。ハーメルさんは本当に切れると思って言ったのか、それとも冗談なのか。

子供の頃からずっと世話になってきているが、ハーメルさんの底は未だにしれない。

「と、言うことなのでミツ、頑張つてこれぶつた切つてね」

そう言つて、眞森は傍らの、これ、を軽く叩く。

……俺は眞森がポンとたたいた、これ、に目を向ける。

、これ、

眞森はまるで巻藁か何かのような、軽〜い調子で言っているがとんでもない。

眞森の横にズモモと鎮座する、これ、。そう、これ、の正体とは……。

「……いくらなんでも、これはむりじゃねーか？」

全長が、俺の身長よりわずかに低いだけの、石の灯籠だったりする。

なお、詳細な描写をすると、形は全体的に曲線を帯びており、柱の部分には、エンタシス法と言う奴が使われているのだらう。下から上に上がるにつれて、緩やかに細くなっている。そして所々は苔にむされてボロボロになっているが、上部や、台座などには細部に何かと手がかかっている。そして……そしてなにより無茶苦茶硬そうだったりする。

「えー。だつてさつき、何でも切れるつて言つたじゃん」

「いや、たしかにそうは言つたけど……でもそれ言つたのは俺じゃないし。それに刃が折れたりして、飛んできたらあぶ〜ん」

「いーからさつさとやる！ 男ならグダグダ言わない！」

「……ハイ」

こんな時に自分の無力さを、一番痛感する。

まあ、いつまでもブチブチ言っても仕方が無いので、気分を切り替えてさつさと切ることにする。

……腰に手を伸ばす。

カチリ……。

ズボンにベルトで止めてある、神の嘆きの柄に触れた瞬間、自分の中で歯車が噛み合う感覚がする。

崩城に引き取られてからの訳十年間。その歳月で培われたものにより、俺は刀を握ると、瞬時に心を切り替えることができる。

今まで動いていた機関が止まり、別の機関が動き出す。頭の中から社会生活をしていくために必要なあれこれが抜けいき、かわり別のもものが満ちていく。守るための知識を捨て、害するための技術を得る。

スポーツ選手等が、試合前に気を引き締める、などという程度ではない。

完全なる精神の切り替え。

……思つに、きつとこれがいわゆる『極み』というやつなのだろう。

ちなみに先生は、刀を握らなくても、この境地に達することができていたらしい。

そんな事を考えている間も、体は記憶に従い動く。

右半身で構え、重心を落とし、右手で柄を握る。

左手で鞘を掴み、地面を踏みしめ、肩の力を抜く。

何千、何万と繰り返した型だ。文字道理体に染み付いてさえいる。ただし、神の嘆きは普段使っている刀より長いため、若干細部を変更する必要があるが。

しかし、なぜか神の嘆きは、初めて握る刀とは思えないほど、俺の手に馴染んでいた。刀身にまで神経が通い、腕が伸びた様な感覚。刀身を撫でる風さえも感ぜられる。

今まで握った刀の中で一番シツクリとくる。

……この刀ならいけるかもしれない。

そう思わせるだけの何かがあった。

「もっと下がってる」

眞森を縁側の下まで下がらせる。

そして、

「……フッ！」

軽く息を吹き、

崩城流居合・椿一線

一息に石灯籠の上部に斬りかかる。そして一歩踏み込み、返す刀で、

「セエイヤアアアアアアアア！」

崩城流居合・重ね椿

石灯籠の竿を切る。

……手応えあり。

俺の手には、たしかに何か固いものを切断した手応えがあった。

……が、

「……………アツレエー？」

納刀までしました後も相変わらず、石灯籠は俺の前に鎮座していた。

……二秒、三秒、四秒。

何秒か待つてみるが、切れるどころか、欠けてさえくれない。

「……おつかしいな？ たしかに手応えが……。残線も綺麗にいったし、力加減もバッチリだったのになあ……って眞森？ どうした？」

「ミ……ミツ……。へ、へ、へ……」

「屁？」

「塀が……」

俺は、ポカンとした表情の眞森が指差す先を見つめる。その先には、

「へ？」

石灯籠の向こう側、五メートルほど後ろにあるはずの塀が、逆Vの字型に綺麗にポツカリ無くなっており、代わりに街の風景が覗いていた。

「……なあ、眞森？」

「……なに、ミツ？」

「……たしか、さっきまであそこに塀があつたと思うんだが？」

「……あら奇遇ね。私もそう思ってたところ」

もう一度塀があつた部分に目をやるが、やはりポツカリと欠けた

ままだった。

欠けた部分に近寄ってみる。

「……綺麗に切れてるな。それにこの角度は」

振り返って確認すると、すぐ後ろに石灯籠がある。そして石灯籠に刻もうと思っていた斬線がそっくりそのまま塀に刻まれている。つまりは、

「……こりゃあ、俺がやっちゃった……のかな？」

状況証拠から察するに、どうもそうらしい。

「……なくなっちゃったな、塀」

「………そうね」

「………」

……嗚呼。風邪が心地良い。

俺は現実逃避をしつつ、塀の切れ間から吹いてくる風邪を受ける。そしてしれっと腰に刺さっている神の嘆きに視線を落とす。

……なんかヤバイもん貰っちゃったかも。

そう思わずにはいられなかった。

……っーか塀どうしょ。

「うえーん！ うえーん！」

夜道を歩きながら延々と昼のことを思い出していた思考が、どこから聞こえてきた、甲高い子供の泣き声で、今に引き戻される。

俺は現在、オッパイ神様に渡されたメモに従い、待ち合わせ場所に向かっているその途中だ。

その途中。ちょうど崩城邸のある高級住宅へと至る坂道を町へと下っていたそのとき、甲高い泣き声が耳へと飛び込んできた。

その音は出所を探るまでもなく、俺の前方、ちようと傾きが急になっている辺りから聞こえてきた。

早足で駆け寄ってみると、そこには地面にしゃがみこんでいる少女がおり、傍らには近所のスーパーの袋が転がっていた。

「どうしたの？」

俺はしゃがみ込み、少女に目線の高さを合わせると、できるだけ優しい声で少女に話しかける。

……雪久あたりが今の俺を見ていたら、きっと酔でも飲んだような顔をするだろうな。

そんな事を考えていると、少女は顔を上げ、涙で潤んだ瞳で俺を見つめながら、訥々と喋りだした。

「えっぐ……お、お、お使い頼まれてたのに転んじやって……ひっく……ひっく……卵が割れちゃって……」

傍らのビニール袋に目をやると、そのなかにある卵のパックらしきものが、たしかに内側を黄色くしていた。

「ひっく……それに、せ、せっかく買ってもらった服も……」

それだけを喋ると、少女はまた声を出して泣き出した。

「おーよし。よく頑張ったね。もう大丈夫だからね」

そう言い、片腕で御抱き寄せると、ひととき大きな声で少女は泣き出した。……やはり子守は俺には向いていない。

眞森や鷺なら上手く慰めるだろうし、雪久なら持ち前の器用さを発揮し、少女を笑わせることができるだろう。

こういつ時に、つくづく自分の無芸さを痛感する。だが、ここには眞森も鷺も雪久もないのだから、俺がどうにかするしか無い。

俺にしかできない方法で。

そういう訳で、少女を抱き寄せていない方の手で、スーパーのビニール袋を引き寄せる。

体の横の方まで引き寄せると、その上に手をかざす。……そして、自分の中にある機械に火を入れる。

燃料が注入され、温度が上がり、蒸気が満ち、ピストンが動き出す。

歯車が回り、ふいごが空気を送り込み、全体がきしみ、絡繰りが唸りを上げる。

頭のとっぺんからつま先まで。体中の血液がマグマにでも置き換わったような感覚。神経の伝達速度はより高速になり、時折バチバチと火花を散らす。

体中が奇跡を起こすべく活動を始める。

奇跡。

奇異なる先人らの足跡。

かつては歴史の大舞台で活躍していたにかかわらず、その地位を奪われた者たち。

その足跡を、俺はたどる。

……とまあ、カッコつけてみたものの。

「ほい」

掛け声ひとつで、卵がビデオの逆再生のように元の形に戻り、

「……え？」

「ちちんぷいぷいの〜ひょい！」

伝統的な呪文で、裾のほうが破けてしまい、泥がついた服も元通りになり、

「……ふえ？」

「ビビデバビデブー！」

謎の呪文（？）で、ついでとばかりに擦り傷も直してみる。

「……はい？」

奇跡の実態は、実はこんな感じだったりする。奇跡だの何だのかっこをつけているが、その本質は、所詮道具にすぎない。つまり、箸だの、シャモジだのとなんらかわらない。

……怪しげな呪文演唱だの、魔方陣だのもいらないし。

眞森や鶯は、俺や雪久が魔術を使うたびに羨ましそうにしているが、使える人間に言わせてもらつと、ちょっと珍しい道具を持っているぐらいの感じである。

「ほーら。もう泣きやんで。卵も服も綺麗サッパリ元通りだから」

少女は最初、ビニールの袋と自分との間で視線を行き来させていたが、やがて意を決したようにこちらを見つめると、

「……お、お兄さんは、何者……ですか？」

と聞いてきた。

……答えにくいことを聞くな、このお子ちゃま。

「え？　ボク？　ボクは何てこと無い、ただの通りすがりの高校生
だよ？」

「じー」

いかん。これでは、某ネズミーランドの花形キャラだ。

「だ、だからホントに、通りすがりの高校生」

「じー」

「……」

少女が真剣な眼差しで見つめてくる。その瞳は真っ直ぐ俺を貫いており、なんとしても真実を知るまでは動かないと物語っている。
……どうやら言い逃れはできないらしい。

腕時計に視線を落とす。短針と長針が指し示す時刻は、午後六時
二十七分。……どうやら適当に言いくるめる時間もないらしい。

……狂会の方も暇じゃないんだ。小学生にバレたぐらいじゃ来や
しないだろか。それに小学生なら、口止めも簡単に済むか。

無理やり自分を丸め込んだ後、俺は天を仰ぎ、ガリガリと襟足の

部分を掻きむしると、ため息をひとつ付き、

「……………魔法使い」

そう答えた。

そう。

俺は科学と同じ胎盤から生まれ落ち、同じ母乳を口にしたにもかかわらず、様々な理由から社会より排斥された技術。その使い手。その担い手。

魔法使いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0734q/>

銀の刃に を込めて

2011年11月24日16時50分発行